

展示国宝一覧

○ 大図（三河湾周辺）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第八〈自小松原／至上野間〉」

国宝：地図・絵図類 番号22、文化元年、縮尺36,000分の1



千葉県香取市立伊能忠敬記念館蔵

享和3年3月28日の小松原村から4月29日の上野間村（愛知県知多郡美浜町）までの海岸測量の成果であり、主に渥美半島、三河湾周辺、知多半島南部が描かれている。大図の左下外に

「自小松原 北一尺四寸一分三厘
至上野間 西四尺九寸三分五厘

小松原	北一尺四寸三分四厘
細川新田	西三尺六寸九分六厘
	南一尺〇 八分九厘
師寄	西 二寸七分
	北一尺一寸四分九厘
布土	西 四寸三分八厘

と墨書され、大図の測線の末端同士などの位置関係が記録されている。

この大図には能登半島の大図と同様に接合するための切り込みが入っている。目を引くのは、三河湾奥に突出した砂嘴「水中洲」である。下の図はこの部分を拡大したものと、同範囲の地理院地図である。埋立が進み、トヨタをはじめとする工場地帯と変貌し、伊能図とは大きく様相が変わった地域である。『会報』第69号の「伊能図の旅」に、星埜由尚会員による詳細な解説がある。



千葉県香取市伊能記念館所蔵

○ 大図（知多半島北半～名古屋～木曾川下流）

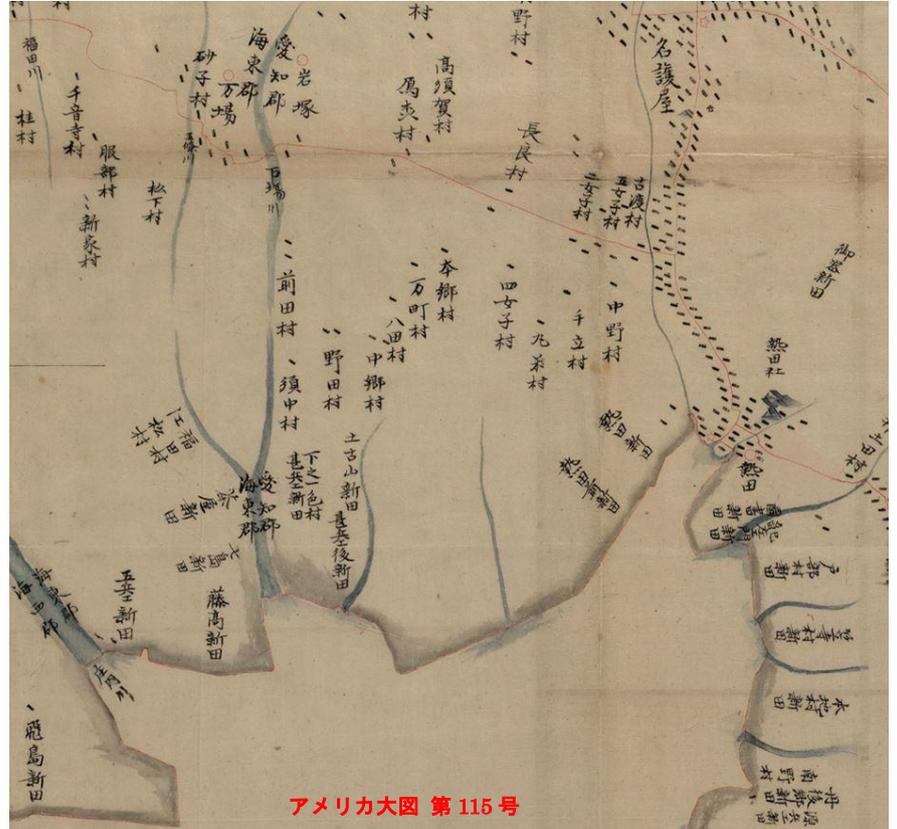
「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第九〈自上野間／至起〉」

国宝：地図・絵図類 番号23、文化元年、縮尺36,000分の1

享和3年5月14日に起宿（愛知県一宮市）到着するまでの測量の成果であり、知多半島の北半の両岸と伊勢湾奥、熱田、名古屋等が描かれている。4月29日と5月1日に宿泊したのが小鈴ヶ谷村の「止宿酒造人にて盛田久左衛門」である。ソニーの創業者・盛田昭夫の実家である。『会報』第83号所収の柏木隆雄会員が「忠敬が宿とした盛田久左衛門家」で紹介している。

5月6日には「五ッ頃熱田宿出立。量程車にて測る。四ッ頃に名護屋城下玉屋町に着」とあり、小田原、駿府、金沢とともに量程車を使用した例である。アメリカ大図や国会大図では名古屋、金沢などの止宿先の町名は省略されているが、国宝大図では玉屋町が明記されている。今一つ気になるのは、国宝大図の「熱田明神」がアメリカ大図では「熱田社」と改変されている点である。神仏判然令の影響だろうか。

伊勢湾奥のこの地域は新田開発が進んでおり、忠敬も熱田新田について測量日記に、この新田は村高が4487石、577軒と記し更に「大新田なり」と特記している。



○ 大図（大垣・関ヶ原・伊部・木之本）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図 第十〈自起／至木本〉」

国宝：地図・絵図類 番号24、文化元年、縮尺36,000分の1

享和3年5月24日に木本宿（滋賀県長浜市木ノ本）に到着するまでの測量の成果である。関ヶ原から北国脇往還を通過して、春照宿、伊部宿、木之本宿を経て敦賀から加賀測量へと向った。琵琶湖岸の測量は第5次測量時のため、この大図には琵琶湖は描かれておらず、湖北地域は伊吹山系の麓を測量している観がある。

『測量日記』の享和3年5月18日の記事によると、忠敬は従者の伊能吉兵衛を連れて測量隊から離れて、垂井宿から美濃国一宮の南宮大社を参詣した。さらに南下し養老滝を見物してから、関ヶ原に向かい、郡蔵ら測量隊も関ヶ原まで測量を終えた後に養老滝見物に向かった。なお、大図には「南宮明神」はあるが養老の滝は描かれていない。なお、アメリカ大図では南宮社と改変している。

関ヶ原では5月19日～21日まで雨天逗留となったが、その間に書状のやりとりが行われた。5月19日に暦局へ出した書状は会報91号の「伊能忠敬の未公開書簡(二)」で紹介されている。5月20、21日には西村太沖の弟子の小原治五右衛門が4月11日付の至時書状と5月9日付け西村太沖の書状を持参した。両書状は5月22日の『測量日記』に転記されており、今回はその部分も展示されている。

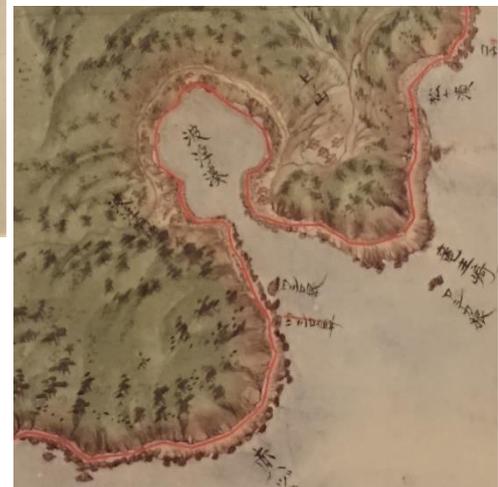
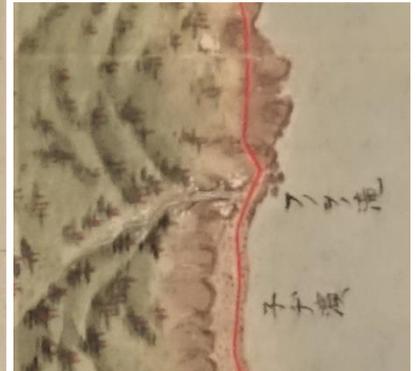


○ 特別図（伊豆七島：大島）

「伊豆国附大島沿海図」

国宝：地図絵図類 番号 117、文化 13 年、12,000 分の 1

文化 12 年 10 月 21 日～11 月 8 日までの第 9 次測量の成果で、火山地形が良くわかる地図である。10 月 28 日に測量した「フノヲノ滝」（フノオノ滝）は伊能図に描かれた唯一の滝とのことである。10 月 24 日に測量した「佐野浜（砂の浜）」は玄武岩の溶岩が砕かれた砂礫の黒い浜辺で、ウミガメの産卵地として知られる。この伊能図は色遣いやタッチがダイナミックで、第一展示室の上記 3 鋪の穏やかな彩色とは全く異なる。



地図は全て
千葉県香取市
伊能忠敬記念館所蔵

○ 特別図（伊豆七島：新島・式根島）

「伊豆国附新島并属地内式根島沿海地図」

国宝：地図・絵図類番号 121 文化 13 年、縮尺 12,000 分の 1

文化 12 年 9 月 11 日に測量隊は神津島から新島に着船し、新島を拠点として周辺の利島、式根島を測量した。式根島と新島の測量は 9 月 24 日～10 月 3 日であったが、さらに 7 日間の風待ちを余儀なくされた。9 月 26 日に測量した羽伏浦のまっすぐ伸びた浜辺も印象的である。海の青と、流紋岩が風化した石英などが堆積した白い砂浜と、海から一定の距離を保って引かれた測線の朱のコントラストが鮮やかである。亀見ヶ森浜については測量日記に「毎年夏の頃、亀集る」と特筆している。



○ 特別図（伊豆七島：利島）

「伊豆国附利島沿海地図」

国宝：地図・絵図類番号 118 文化 13 年、縮尺 12,000 分の 1

文化 12 年 9 月 14 日に測量隊は新島から漁船四艘で利島に渡ったが、測量日記に「舟着悪し」とあるように上陸に苦労したようである。下の地図でも島の周辺はゴロゴロとした石浜が続いている。その日のうちに利島測量を終えることができた。ところが、翌 15 日から「高波逆風」「北風烈舟不出」が続いた。20 日の測量日記には、当島の水は払底し、入湯出来ず、天水の腐水を以て炊飯し、飲み水としたとある。翌 21 日ようやく新島に帰着した。

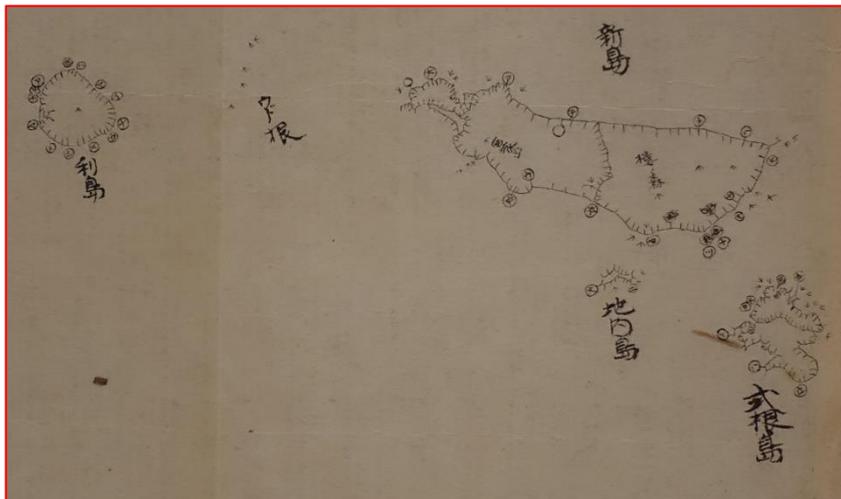
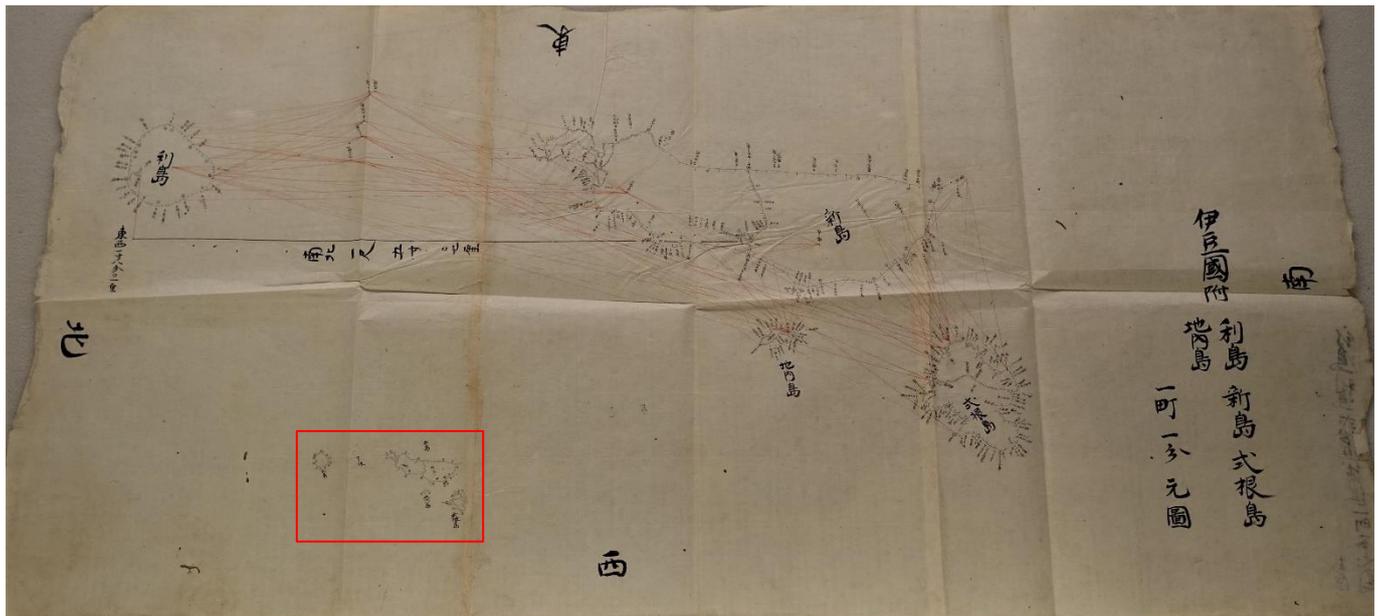
右の地図は利島北部の前浜集落の部分を拡大し、文字が読みやすいように南北を逆にしたものである。図中の日蓮宗海岸寺が測量隊の止宿となった。



下図（伊豆七島：利島・新島・式根島・地内島）

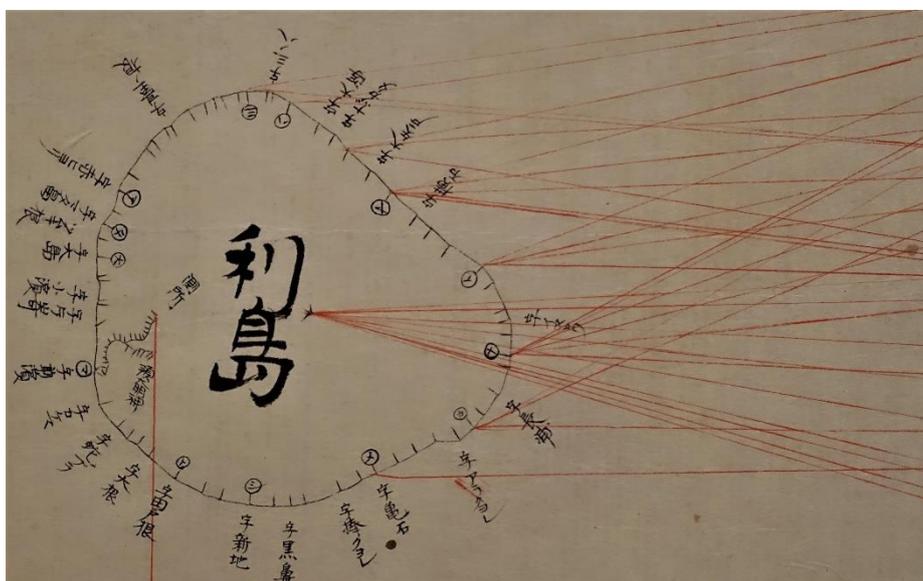
「伊豆七島利島・新島・式根島・地内島下図」

国宝：地図・絵図類番号 177 文化 13 年、縮尺 36,000 分の 1 と 216,000 分の 1 96.5×47.6CM



図名に「一町一分原図」とあるので大図の縮尺である。ところが展示解説には縮尺 36,000 分の 1 と 216,000 分の 1 と二つ記載されている。見過ごしてしまいそうであるが、四角く囲った部分に中図の縮尺で描かれている。左図が赤枠内を拡大したものである。裏面には「新島・利島・式根島・地内島一町一分之図 寄濟」と記されている。

この下図では各島の位置関係を確定するための朱の交会線が目立つ。先程の利島の部分を拡大したのが下の図である。



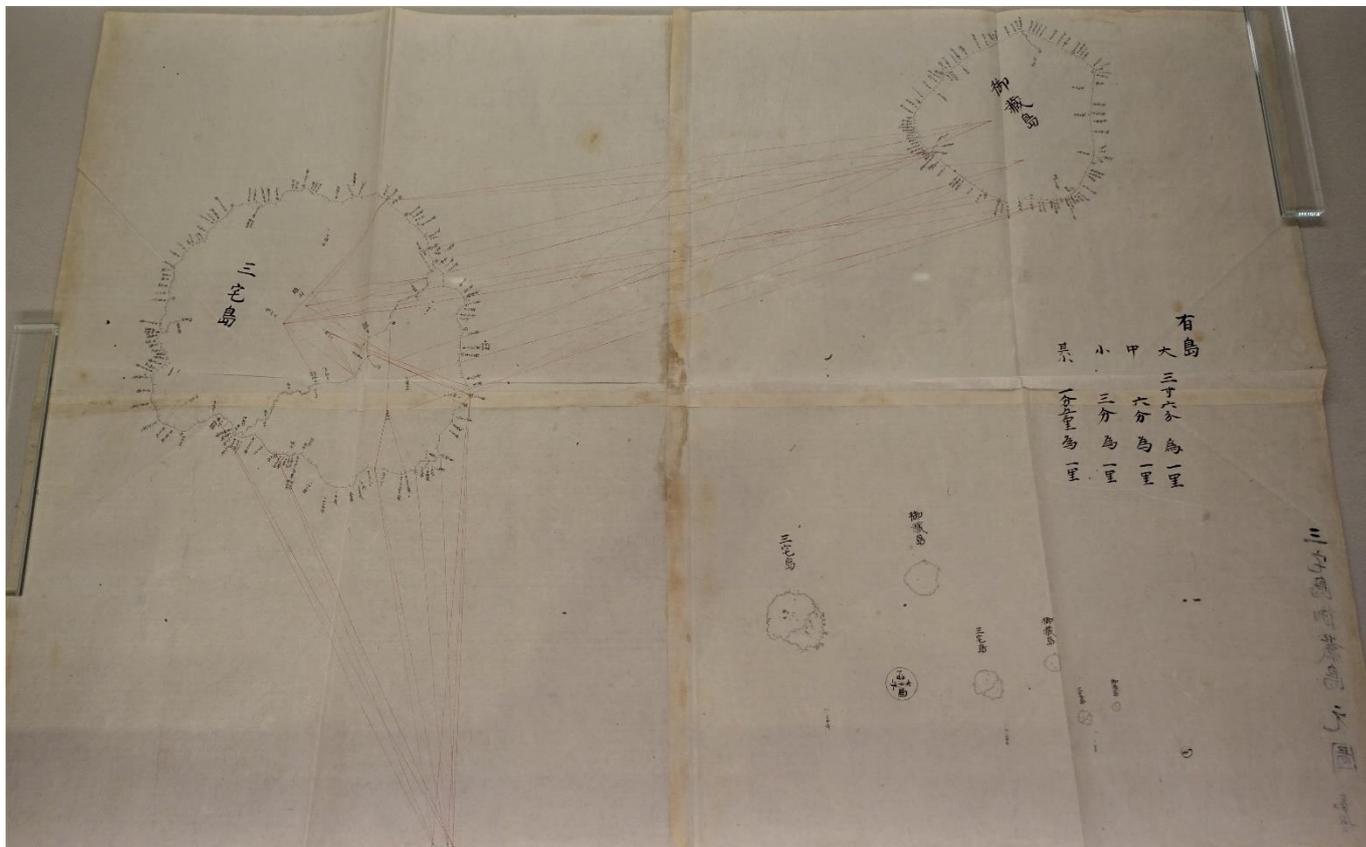
地図は全て
千葉県香取市
伊能忠敬記念館所蔵

○ 下図（伊豆七島：三宅島・御蔵島）

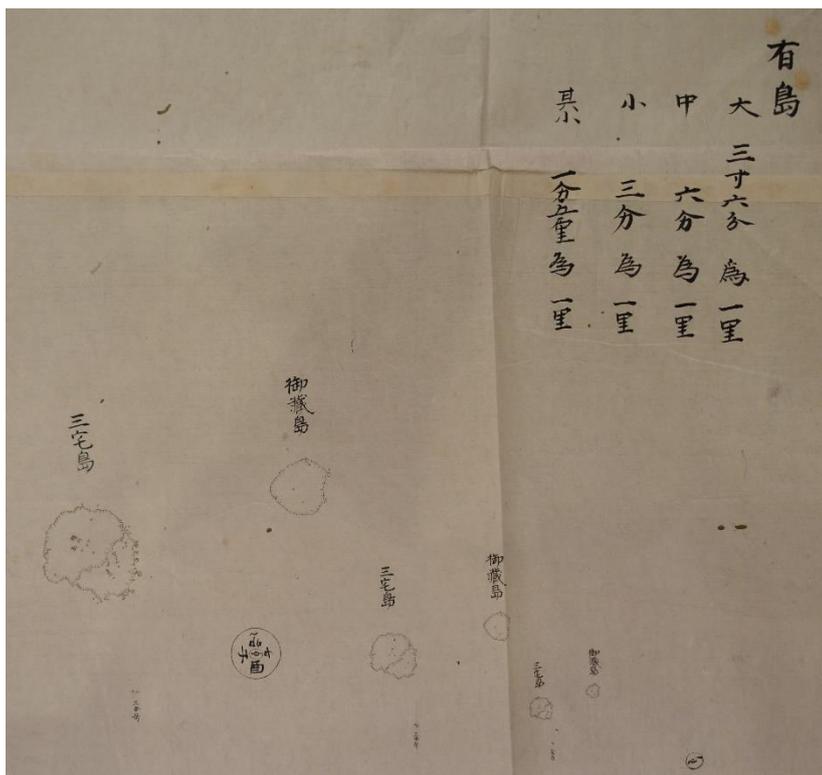
「伊豆七島三宅島・御蔵島下図」

国宝：地図・絵図類 番号 2 8 2 36,000分の1、216,000分の1、432,000分の1、864,000分の1
93.2×64.8cm

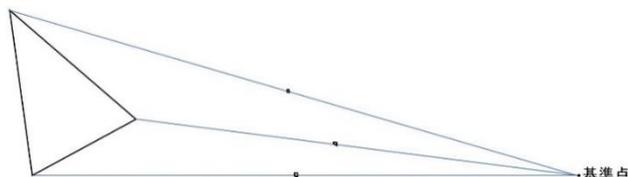
この下図は両島が「大 三寸六分 為一里 (36,000分の1) 」の縮尺で描かれ、朱の交会線が引かれており、裏面には「三宅島御蔵島元図 寄濟」と記載された下図である。



この下図を有名にしているのは、右下に「中 六分 為一里 (216,000分の1)」、「小 三分為一里 (432,000分の1)」、「其小 一分五厘 為一里 (864,000分の1) 」の縮図を併記しており、針突法を使って容易に縮尺を変えて作図する方法を示していることである。



原図の屈曲点の針穴と基準点を結ぶ線の半分の場合に点を打ち、これらを結ぶと半分の大さの縮図となる。縮図の基準点には⊙と墨書し針穴も確認できる。



忠敬を取り巻く人々を紹介するコーナーです

○ 「測量日記」(享和3年5月21日)

「享和三癸亥歳沿海日記 上」 国宝：文書・記録類 番号73

5月20、21日には西村太沖の弟子の小原治五右衛門が4月11日付の至時書状と5月9日付け西村太沖の書状を持参した。両書状は5月22日の『測量日記』に転記された。「越中国城端と申所の町医者に西村太沖と申男有之候。曆学執心にて、先年大坂麻田剛立弟子に成、大坂へ両三年逗留にて修行致し、其後度々出坂にて、今以不怠修行いたし候。…」と紹介している。

○ 「忠敬先生日記」(享和3年5月21日)

「忠敬先生日記 十一」 国宝：文書・記録類 番号106

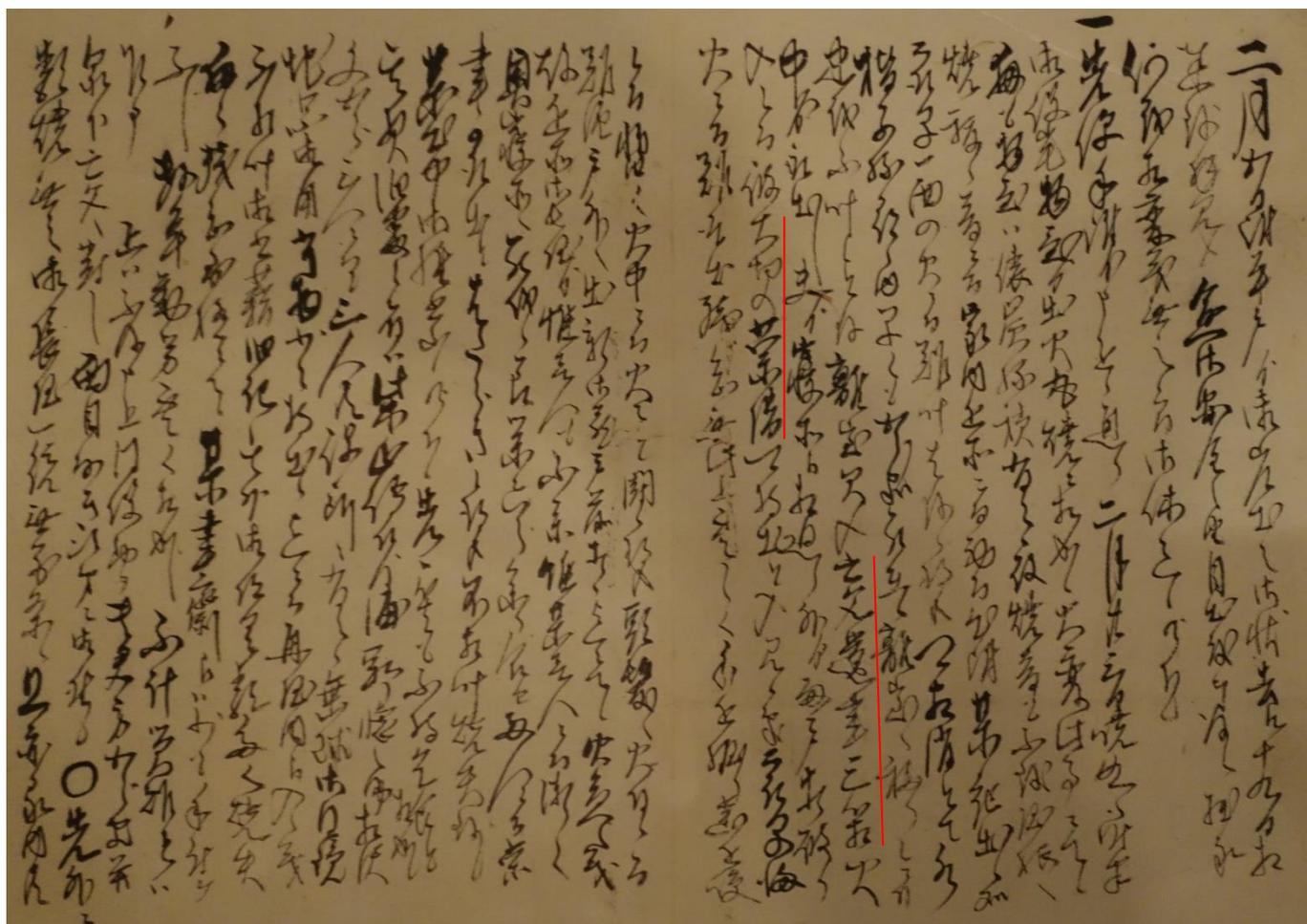
『忠敬先生日記』の同じ日の部分が展示されているが、「廿一日 朝小雨。五ツ後ニ止。曇天。小原治五右衛門、高橋先生ノ御状、西村太沖ノ書状持参対顔。此夜晴天測量。」とあり、ほぼ測量日記と同文である。しかし測量先で日々書き留めた先生日記の段階では、受け取った書状は転記されていないことがわかる。

○ 高橋景保から忠敬宛の役宅の火災を伝えた書状(文化10年3月26日)

「高橋作左衛門書状」 国宝：書状類326 「高橋作左衛門」から「伊能勘ヶ由様」あて

文化10年2月23日夜半に暦局の高橋景保役宅の物置から出火し全焼した火災の詳細を伝えた書状である。『埼玉大学紀要』17、『高橋景保の研究』に翻刻がある。会報33号に安藤由紀子氏が紹介している。

大意を示す。「亡き父(至時)の遺書(至時が心血を注いだ「ランデ暦書管見」か)三箱を火の中から救いいただきました。それから寝室からまわって外から雨戸を打ち破り、例の大切な蘭書(ランデ暦書か)持ち出そうとしましたが、火の海で取り出すことが出来ず、残念至極、空しく手を握り歯噛みをするばかりで、しばらくは火中にて火とたたかいましたが、頭髮へ火がついて耐え難く戸外へ出て…」



千葉県香取市伊能記念館所蔵

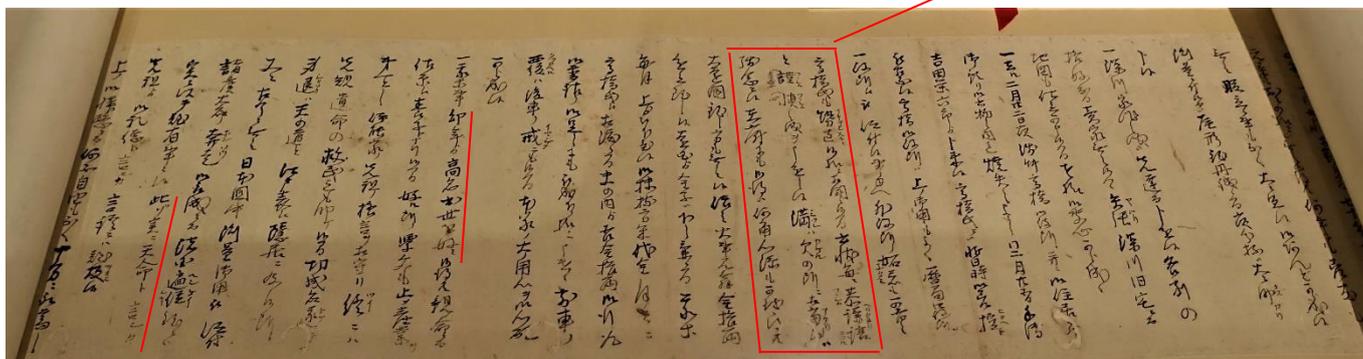
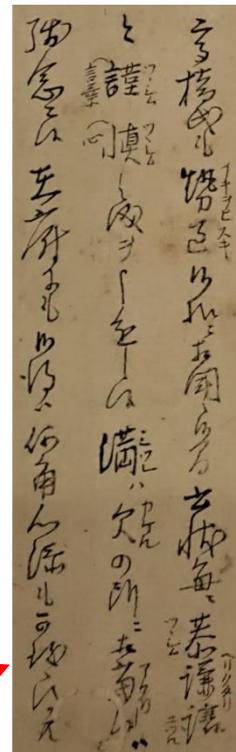
○ 忠敬から妙薫に宛てた書状（文化10年4月27日）

「伊能忠敬書状」国宝：書状類8 「東河翁」から「妙薫御坊」へ

忠敬が対馬の大浦から佐原の娘の妙薫に宛てた書状である。展示部分前半は景保役宅炎上の書状を受けての感慨を記した部分である。

大意を示すと「書状を出すごとに、恭（つつしみ）、謙（へりくだり）、譲（ゆずる）と、言葉を謹（つつしむ）、心を慎（つつしむ）ということを申ししてきました。満れば欠けるの通りになって、大変残念です」とある。

展示後半には「幼年より高名出世を好み」「実に天命といわんか」と自分の生涯を振り返り述懐している。有名な書状であるので、『伊能忠敬書状』7をはじめ『忠敬と伊能図』、『伊能忠敬』（別冊太陽）、『伊能忠敬測量隊』、会報33号、会報54号などに写真や翻刻、解説が載せられている。



千葉県香取市伊能忠敬記念館所蔵

○ 伊能景利の写本

国宝ではないが、伊能景利（忠敬の妻ミチの祖父）による写本を紹介している。景利は多くの書物から抜き書きをつくり「千代古見知」としてまとめたことで知られている。今回の展示では抜き書きではなくまるごと写本したものを紹介しており興味深い展示となっている。

景利の学芸については、酒井右二氏の「元禄・享保期在町上層民の文化活動」（『千葉県の歴史』通史編近世2）に詳しい。